

# 豊国の土蜘蛛

長 洋 一

(一)

豊前国・豊後国はもと豊国といひ一つであつたが、持統九年（六九五）頃に両国に分かれた。<sup>(1)</sup> 豊国は九州の東北部に位置し瀬戸内海にも面し、畿内地方とは早くから交流があつた。<sup>(2)</sup> 日本書紀・豊後国風土記・肥前国風土記には景行天皇の熊襲征討・土蜘蛛討伐の九州巡幸説話をのせるが、この時の上陸地点も豊国になっている。そしてこの豊国については土蜘蛛についての説話が多い。

土蜘蛛は、この豊国―豊前・豊後両国のほかに肥前・肥後・日向の国々、あるいは大和国・摂津国・常陸国・陸奥国・越後国などに居たとする説話がある。だがこの論文では景行天皇巡幸説話で大和王権の九州進出の最初の地点とされる豊国において、土蜘蛛のもつ問題を考えた。

この豊国の土蜘蛛について日本書紀・風土記に述べられる土蜘蛛像は「皇命に従はざる」者、「山川の險しきを待みて、多に人民を掠む」者、「要害の地」にいて「各眷属を領いて、一処の長と為る」者、また「石窟」に住み、「無石の堡」を造つてその中に住む者となっているが、日本書紀の神武紀に出てくる大和国の土蜘蛛については「其の人と為り身は短くて手足は長く、侏儒と相類たり」としている。これらをまとめてみると、土蜘蛛は朝廷に反逆し、周囲の住民と対立し、集団をなす原始的な異人種というイメージのものとなる。しかしこのような土蜘蛛像は、これらの土蜘蛛を倒していった大和王権の立場のものであり、九州における景行天皇の巡幸説話もまたこの大和王権によ

る国家統一後に、この統一過程を説話化して作られたものである。このような立場で作られた史料からは、土蜘蛛の実体を知るのはむづかしい。だが現存する豊国の土蜘蛛に関する史料は、日本書紀や風土記の景行天皇巡幸説話によるものしかないもので、これらの史料を批判することではしか土蜘蛛の実体にせまることはできない。そこではじめに書紀の景行十二年の九州巡幸説話にみえる道順についての問題を検討しておきたい。

景行天皇十二年七月の条には「熊襲反之不朝貢」とあり、これが天皇の九州巡幸説話の始まりである。ついで出発し九月、周芳婆摩…（豊前国の土蜘蛛討伐）…豊前国長峽県…十月、碩田国…速見色…直入県…柏峽大野…（豊後国の土蜘蛛討伐）…十一月、日向国高屋宮…十二月、（…熊襲鼻帥を殺す）…十三年五月…（襲国を平定）…十七年三月、子湯県…十八年三月、夷守…（諸県君泉媛大御食を献ず）…四月、熊県…海路で葦北水嶋…五月、火国八代県…六月、肥前国高来県より海路で火国玉杵名邑…（土蜘蛛を殺す）…阿蘇国…七月、筑紫後国御木…八女県…八月、的邑…となって都にかえる。この道順は、律令時代の西海道東路・西海道西路の官道と重複している所があり、この景行天皇の熊襲征討の巡幸説話の構想の背後に、九州の官道のイメージがあることは否めない。

津田左右吉氏は景行天皇のこの巡幸説話をつぶさに検討して、この説話が事実の記録ではないとしながらも、この説話を構想していった書紀編者の地理的誤りを指摘した。景行天皇が豊前国長峽県から豊後にいくのに北から入ると速見—碩田の順であるべき筈なのに、これが逆に碩田—速見になっているのは地理的不案内による誤りであるという。<sup>③</sup> 景行天皇の巡幸が官道に従っているものとして構想されたとすればこれは誤りである。これに対して井上通泰氏はこの碩田—速見の道順を誤りとはしない。氏によると、天皇は豊前国長峽県より出発して、豊後国の西北部より日田郡に入り大分川にそって下り碩田国に入り、そこから改めて速見邑に入ったと考えた。<sup>④</sup> この井上氏の論の前提には、長峽県から日田郡に向うのには山国川ぞいの道があり、それが古代にも存在したということの認識があったようだ。氏はこの説を述べる豊後国風土記新考を書くに当って、岡藩の儒医唐橋世済の著した箋釈豊後国風土記・豊後

(5) 国志をよく読んでいるし、この豊後国志の中には豊前国から日田郡にいく道があることを記している。中津から山国川ぞいに耶馬溪を通じて日田にいく道である。井上氏の長峽県から日田に入るといふ発想はこのような道があるという認識なくしては出てこない。豊前・豊後の地理に立脚した井上氏の論には、学ぶべきものがある。しかし両氏ともに、この土蜘蛛討伐説話を日本書紀の叙述のままに、後の官道の周辺のみつろわざる者の征討説話として考えている。これでは土蜘蛛討伐の真の意味が判らないのではなからうか。私はこの官道コースのイメージを取り去って、まず土蜘蛛の居住地の地理的特色を地図の上で考えた。そうするとこの居住地が、意外にも道に深い関係があることが判ってきたし、碩田―速見という道順が、井上氏とは異なった根拠で史実の反映と考えられることになった。豊国の土蜘蛛は従来の土蜘蛛像とは異なったものになってきたのである。以下このことを具体的に論じたい。

## (二)

景行紀における土蜘蛛討伐の出発点は、周防国娑摩であり、天皇が船にのりここまで来た時、豊前の神夏磯媛は船に賢木をたて剣と鏡と玉とをこれに掛けて帰伏を申し出、豊前の逆ろろ土蜘蛛―菟狭の川上の鼻垂・御木の川上の耳垂・高羽の川上の麻剝・緑野の川上の土折猪折のことについて述べた。天皇は武諸木らを遣して、まず麻剝を懐柔させて、他の三人の土蜘蛛らを誘い召して、彼等をその輩下のものどもと共にことごとく殺した。こうした後に天皇は娑摩より豊前の長峽県に到り、そこに行宮を造った。その後ここから豊後の碩田国に向うのである。

豊前の土蜘蛛討伐については以上の如くであるが、従来の土蜘蛛観で無視されていたのは、彼らの居住地の交通上の特色である。日本書紀には彼らの居住地について「其所拠並要害之地、故各領眷属、为一处之长也」と記し、彼らは川上の要害の地に集団をなして住む者としている。だが彼らの居住地を改めて地図の上でみると、彼らの居住地で

あるそれぞれの川の川上には、その背後の山を越えて、その山の裏にある盆地や平野に通じる道があることに気づくのである。

高羽の川上の麻剝の居る所は、高羽は田川だから現在の田川郡を流れる川の川上である。この川は遠賀川の支流で、彦山に源を発する現在の彦山川である。この川上の地域は彦山の西側の山峡に当り、ここには筑前の小石原に抜けて、把木あるいは秋月に至る道がある。伊藤常足の太宰管内誌(天保二年)の豊前田川郡の条の下には「彦山ノ坊中より西ノ方に」朝抜という地があり、ここは彦山川の上流に当り、ここでその支流である朝井川と緑川が合流し、一般には落合にとばれ、そこは「筑前国上座郡小石原に至る道筋なり」としている。また常足がこの太宰管内誌の豊前国の初めの所に載せている当時の地図をみると、落合を通って小石原にいく道が記入されている。貝原益軒が元禄時代に著した筑前国続風土記の上座郡小石原村の条には「此の町を通り、彦山の方にも行くに長谷を下る」とある。この長谷とは、さきに述べた彦山から小石原にいく道筋にある村であった。このように麻剝のいた高羽の川上には、小石原を通り、把木にいき、あるいは秋月にいき筑後平野に抜けていく道があった。この道が古代からあったかどうか不明だが、近世には存在していたことを確認しておきたい。

つぎに御木の川上の耳垂だが、この御木は三毛であり、奈良時代には上毛郡下毛郡に分かれていた。この三毛地方を流れる川は山国川であり、その上流は耶馬溪になる。ここには日田に抜けていく道があるが、近世においてもこの道は重視されていた。唐橋世済の豊後国志の日田郡の路程の項には、日田を通る主要な道がまとめられ、その一つに「豊前国宇佐宮路。中津城路。永山布政所北。至夜開郷伏木村。三里餘。所經：羽野、財津一里、藤山、秋原一里、一ノ瀬、伏木一里。是豊前国下毛郡界也。自是距宇佐宮。十二里餘。通計十六里。距中津城。十里餘。通計十四里。」とある。日田から伏木までいった道は、豊前国の下毛郡に入り、耶馬溪を通り、その先は仲津城と宇佐宮とに分かれていくとし、日田から仲津城まで、あるいは宇佐宮までの距離が十四里、十六里と記されている。耳垂の居住地はこの道の耶馬溪地方であったと考えられる。しかしこの

道の存在はいつの時代位までさかのぼって確認できるだろうか。筑後国風土記逸文は、筑紫国造磐井が「官軍」に討たれて、ひとり「豊前国上膳県」に逃がれ、「終于南山峻嶺之曲」とその最期を記している。筑後平野で戦った磐井が上膳県にいく道を考えると、耳納連山の北側の道を日田に行き、ここから耶馬溪に抜けて三毛地方に出る道が想定される。風土記の磐井に関する記事は日本書紀と相異なるが、<sup>(6)</sup>いまはこの問題にはふれない。筑後国風土記の成立は、西海道風土記の乙類として、藤原宇合がこれに関係ありとされ、天平四年以後に彼の手許で編述されたと考えられている。<sup>(7)</sup>磐井が上膳県で死んだという記事が暗黙の中に前提とする筑後平野―日田―御木の川上（耶馬溪）―上膳県という道は、天平年間にすでにあったということになる。近世において確認された道は天平時代まではさかのぼって存在していたようである。

つぎに菟佐の川上の鼻垂であるが、この菟佐の川は駅館川である。この川は上流へさかのぼっていくと新洞の所で、東南への川筋と西南への川筋の二つに分かれ、東南への川筋は安心院の方へいき、さらに多くの流れに分かれ周囲の山峡に源を発する。西南の川筋はさかのぼっていくと院内を通り多くの支流をもちつつも、その主流は恵良川とよばれ、源は日出生台にあった。鼻垂はこの院内から安心院にかけての地方にいたのだから、この恵良川（駅館川）にそって宇佐の方から豊後の森に至る道がある。豊後国志の玖珠郡の路程の項によると、豊後の森を通る主要道路に「豊前国宇佐宮路。森宮東。至帆足郷日出生村轡指山。三里。所經。森。小場。日出生。是豊前国下毛郡界也。自是距宇佐宮。七里。通計。十里。」とあり、森から日出生を通して宇佐にいく道のあったことがわかるが、この日出生から宇佐宮にいく道は恵良川（駅館川）にそっていく道である。現在の道が近世にもあったことが確認されるが、実はこの道は時代をさかのぼって弥生時代においても文化伝播の道として確認されている。小田富士雄氏は弥生時代の中広銅銚の筑後から豊前豊後にかけての分布を探るうちに、その分布が「日田郡・日田市で二口、玖珠郡で四口、北接する安心院町で七口、大分郡で五口、北海道郡で一口」となっていて「筑後川をさかのぼり、大分川を下るルート」にそっていることを発見

した。<sup>(8)</sup>安心院だけがこれからはずれるが、玖珠郡の四口が森町から二口、森の南の玖珠町から二口でているのを見る。この森・玖珠の両町のあたりに中広銅鉾文化圏の一つの中心があり、安心院への中広銅鉾の流入は、この地点からということになるだろうし、その場合の道は日出生を通りそこから恵良川（駅館川）にそって下っていく道が想定される。近世で確認された道と弥生時代の文化伝播の道が奇しくも一致したようである。土蜘蛛鼻垂はこのような道にそった所にいた。

つぎに緑野川の川上の土折猪折だが、この緑野川を、伊藤常足の太宰管内志では、彦山川の上流の前述した緑川としている。しかしここは高羽の川上であり麻剝のいた所とされるので、常足の説は当らない。緑野川は通説のように北九州市の南にある福智山に源を発して北流していく紫川であらう。<sup>(9)</sup>とすれば、この川は、福智山に源を発する流れと、この山と連なる東の平尾台との山峡に源を発する流れと、二つの流れがあり、平行して北流し、加用の所で合流して北九州市を貫流していく。この中の平尾台と福智山の間の山峡に源を発する流れは、その南方の香春の採銅所の方から金辺峠を越えて北九州に出る道の道筋になっている。この道は豊後国志にも太宰管内誌にも記されているが、古代にさかのぼると、天平十二年の広嗣の乱の時、広嗣の軍勢が鞍手道・田川道・豊後道と三手に分かれて板櫃鎮所（現北九州市小倉区板櫃）<sup>(10)</sup>に向うその田川道に擬せられている。近世から天平時代までこの道の存在が確認されるが、さらにさかのぼって存在したと考えるもよいだろう。土折猪折はこのような道筋に当る緑野川の上流にいたのである。

以上日本書紀の景行十二年の条に出てくる豊前国の土蜘蛛の居住地とされる所は、だいたい山越えをしていく道筋に当たっていた。高羽の川上から小石原に抜ける道のように、近世までは今のところ確認できても古代までは未確認のものもあるが、道の性格として、主要な道であればかなりの年代をさかのぼらせて存在していたとしても大過ないであらう。

(三)

豊前国につづいて豊後国の土蜘蛛のことにうつるが、この国の土蜘蛛については日本書紀のほかに豊後国風土記にも記載がある。まず日本書紀によると、景行天皇は豊前国の長峽の行宮から碩田国にいき、ついで速見色に到り、ここで速津媛から豊後国の土蜘蛛―鼠の石窟の青白、直入県の祢疑野の打媛・八田・国摩侶のことを聞き、直入県の来田見邑に留った。そこで兵をととのえ、稲葉川の上流に石室の土蜘蛛を襲って殺し、ついで祢疑山の打媛を討とうとするが、これは失敗し、城原に引返して兵をととのえ、手近にいた八田を倒した。そして再度打媛討伐に向おうとするが、打媛は帰伏を申出、許されずついに自ら谷に落ちて死ぬ。日本書紀では豊後の土蜘蛛はこれで平定されたことになるが、書紀は最後に、土蜘蛛を討とうとしてはじめに柏峽の大野にやどるとし、ここで志我神・直入物部神・直入中臣神に「誓い」して、石が柏の葉の如くに舞上ったという説話をのせる。豊後国風土記の土蜘蛛についての叙述は書紀と似てる所もあるが地理的に混乱がある。これは後にふれることにする。

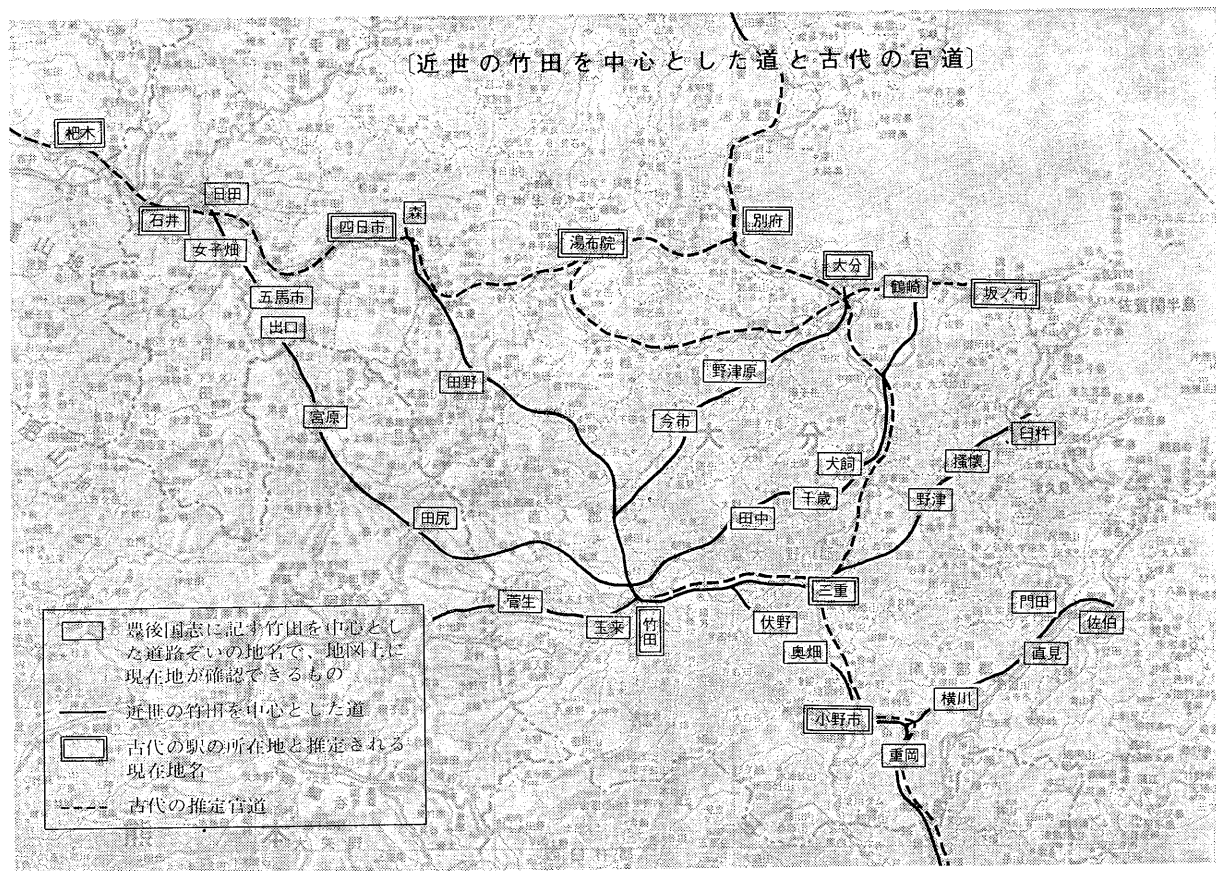
豊前国の土蜘蛛はすべて川上に居住していることになっていたが、豊後国ではかならずしもそのようには記されていない。そこで豊後国では土蜘蛛討伐説話の舞台となった直入県に出てくる地名で、現在でもその地名が確認できるものを調べてみた。三つある。一つは稲葉川である。この川は九住山の南に源を発し、直入郡の中部を西から東に流れ竹田市の東で大野川に合流する。別名を飛田川ともいう。(二)には城原である。土蜘蛛討伐の拠点となる所だが、竹田市の北西部に木原山があり、その南の麓に現在も城原の地名がある。(三)には柏峽の大野だが、豊後国風土記に、日本書紀のこの地名について述べられているのと同じような説話が記され、その地名を柏原郷としている。この柏原の地名は書紀の柏峽と似ているし、両者は同一地名だと考えられている。この柏原の地名は現在も竹田市の西南の阿蘇外輪山東側にある。こうしてみると、直入県の土蜘蛛に関する地名で現在地の確認できるのは、竹田市の西北から西南

にかけての阿蘇外輪山東側の地域にあるようである。祢野も菅生に比定されるとすればこの地域に入る。それらはすべて大野川の上流がいくつもに分かれて、九住山阿蘇外輪山に源を発するその流れの流域に入っている。いうなればこれらの地名に関係する土蜘蛛は大野川の川上にいたということになる。

豊後国風土記には日本書紀とは異った説話があり、景行天皇は周防の娑摩から豊後国海部郡宮浦に上陸したことになる。ここでこの村の長、速津媛からこの国の土蜘蛛のことを聞く。この上陸地点は書紀と異なる。また書紀に稲葉川の川上で石室の土蜘蛛を討つ時に語られる血田・海石榴市の地名が、風土記では大野郡内のこととされ、その時討たれる土蜘蛛は鼠の石窟にいたことになっている。書紀では鼠の石窟は速津媛が速見色で「この山」の鼠の石窟としていて、それは速見色にあったもののようである。このような地理的な混乱が両書の間にはあった。しかし風土記に独自に語られる土蜘蛛として、大野郡網磯野の土蜘蛛小竹鹿奥・小竹鹿臣がいた。唐橋世済の箋釈豊後国風土記によると、この網磯野は竹田の東北の朝地の阿志野だとする。なお大野郡の海石榴市がどこに当るかは不明だが、血田については津田左右吉氏は吉田東伍の大日本地名辞書により、緒方庄に知田の地名があることを指摘した。この知田の地名は現在も存在している。大野郡内の土蜘蛛の居住地と考えられる緒方の知田は大野川の流域にあり、竹田市より少し下流にあり、日向国へ向う道もこのあたりから南下する。朝地の阿志野は竹田から鶴崎に行く道筋に当る。

以上直入県や大野郡の土蜘蛛の所在地についてみてきた所を、改めて地図の上で確認しそれらと道との関係を考えてみたい。そのために、唐橋世済の豊後国志にみえる直入郡の竹田を中心とした近世の道を地図に記入してみた。（地図参照のこと）豊後国志にみえる道路ぞいの地名で、現在にも残るものを確認し、それをつないで近世の道を復元した。この道路地図をみると竹田には、別府湾や豊予海峡ぞいの海岸の要港から通じる道があり、ここからはさらに内陸の阿蘇盆地へいく道、阿蘇外輪山の上を通して小国から日田へいく道があった。近世の竹田は交通の要地であった。土蜘蛛はこの竹田の周辺に多くいたことになっているが、竹田のもつ交通の要地としての性格はいつの時代ま





でさかのぼれるだろうか。

そこでまず、竹田から久住町を通り、田尻・宮原(小国)を通り、五馬市を経て日田にいく道を考えたい。この道の途中に満願寺の地名があるが、ここにある満願寺は、満願寺年代記によると文永十一年(一二七四)に北条時頼の弟時定によって造られたという。寺は道ぞいにたてられることが多く、満願寺の立地が道ぞいになっていることは、すでに当時この道があったことを示す。南北朝時代の正平十四年(一三五九)懐良親王と菊地武光は豊後攻撃を行うが、阿蘇大宮司惟村は懐良親王に反旗をひるがえし、二人の菊池への退路を断つために小国に九ヶ所の城郭を構築した。これは小国が「肥後と豊後との交通の要路に当る」<sup>(12)</sup>からだという。満願寺ぞいの道も豊後から小国を経て日田あるいは肥後に至る重要な道であった。

その外の道を考えるために、地図に古代の官道にあった駅名で現在地の確認できるものを記入してみた。西海道東路ぞいにみると、この道は豊前国宇佐駅から安覆駅を通り湯布駅に出るといふ説もあるが、これは山道をたどることになり官道としては不向であり、官道はやはり日本古典文学大系「風土記」の付図のように、宇佐駅から立石町を抜けて日出町に出ていくコースであろう。これでいくと宇佐駅のつぎは長湯駅になる。この駅は現在の別府市の中に比定される。<sup>(14)</sup>つぎは高坂駅であり、これは旧豊後国府であり、現在は古国府とよばれて大分市内にある。つぎが丹生駅だが、これは、和名抄に海部郡に丹生郷があり、ここにあったと思われるので現在の坂ノ市町丹生のあたりになる。

つぎが三重駅となるが、これは現在も三重の地名があり、そこに比定されるし、つぎの小野駅も三重の南に小野市の名が現存していて、ここである。この三重と小野を結ぶ道はさらに南下して日向国に入り長井駅に至る。以上の西海道東路に対して、大宰府から日田を通って豊後国府の高坂駅に至る豊後道の駅がある。この道が豊後国に入ってすぐあるのは日田の石井駅だが、これは現在も日田市に石井の地名があり、ここにあった。つぎは荒田駅だが玖珠町の四日市に移される以前の所在地は不明となっている。つぎが湯布駅であるが、由布岳の麓の湯布院町川上のあたりにあ

った。こうして石井駅荒田駅湯布駅とつなぐ官道は、つぎに別府湾に抜けて前述の長湯駅が高坂駅で西海道東路につながる。以上豊後国の古代の駅の所在地を検討してきたが、最後に一つ残ったのが直入駅である。その名からしてこれが直入郡内にあったことはまちがいないが、詳しくは不明である。和名抄によると、直入郡には朽網郷と三宅郷と直入郷の三郷があり、豊後国風土記ではこの外に柏原郷が加わって四郷となっている。このどの郷かに駅があったはずである。郡名をつけた駅なのでおそらく郡家の所在地にあったと思われるので、郡家がどこにおかれていたかを考えてみる。

豊後国風土記には、各郡の郷名や地名の下には「在郡東」とか「在郡西」とか記され、この郡とは郡家をさしている。直入郡の朽網郷の下には「在郡北」とある。直入郡に入っている久住山のことを風土記では救軍山といっている<sup>(15)</sup>ので、朽網郷はこの久住山を含む地域で、この山の東の麓で大分川の上流地域に当るのではなからうか。来田見邑もこの地域にあっただろう。郡家はこのような地域の南にあることになる。つぎに柏原郷だが、この郷名の下には「在郡南」とあるので、現在にもその地名の残る柏原の北に郡家はあることになる。あとの二郷についてはその所在地を確かめうるような記述はなく、郡家の置かれた郷は、朽網郷と柏原郷とにはさまれた地域ということになる。

現在竹田市の東北部に三宅の地名がある。これはおそらくかつての三宅郷の遺称地であろう。唐橋世済は豊後国志の中で、直入郡の中にある地名を旧四郷に分類して記している。それによると、三宅郷には前述した三宅を東の端として、玉来川の北側、木原山の北麓までを囲む現竹田市の北部地域をあてている。この地域は朽網郷の南、柏原郷の北となる。また唐橋世済は直入郷を柏原郷の東から南にかけてあるとしているので、こうなると郡家の所在地は必ずから三宅郷ということになり、直入駅が置かれたのもこの郷ということになる。

律令制下の直入郡の地にはかつて直入県が置かれていたし、またこの郡に三宅郷があることは、ここに屯倉が置かれたことである。この地が大和王権と密接な関係があることが判る。また直入地方に、直入物部神、直入中臣神があ

ったという伝承が日本書紀に出てくるが、このような非在地的な神の伝承がここに現われるのは、在地に対する大和王権の新しい支配体制の形成をうかがわせる。

それともあれ、九州に置かれた県や屯倉がともに交通の要地であったことは、井上辰雄氏や彌永貞三氏によって指摘されている<sup>(16)</sup>し、直入郡の地にかつて県や屯倉が置かれたことは、この地がすでに交通の要地であったことを示し、この地に直入駅が置かれたことは肯けるのである。そして直入駅が置かれたのが三宅郷だとすれば、それは現竹田市の一部であったので、近世の道路地図で確認された竹田の交通の要地としての性格が古代にまでさかのぼり確認できたことになる。

土蜘蛛の所在地は、以上のように交通の要地であった直入駅の周辺について語られ、そのあたりは東から来た道が阿蘇盆地へ山越えしていく道筋にあたり、また東から来た道が直入駅あたりから分かれて、阿蘇外輪山の上を通って小国にいくその道筋にもあたる。土蜘蛛はやはり道と深い関係があったといえることができる。豊後国の土蜘蛛は直入郡の外に大野郡にもいたが、これが道に關係があることは前にふれた。また速津媛が言った速見邑での「この山の鼠の石窟の青白」は、この山が由布岳ならば、その山の南の麓には湯布駅があり官道が通っていて、やはりこの「青白」も道に關係がありそうである。その外豊後国風土記には日田郡石井郷に土蜘蛛の堡ありきとしているし、石井の南にある五馬山には土蜘蛛五馬媛ありきとする。石井郷は前述したように駅が置かれた所で交通の要地であった。五馬媛の住む五馬山には五馬市があり、これは日田から宮原II小国を通り竹田の方に抜けていく道の日田よりの地点にある。この道は鎌倉時代まではその存在を確認していたが、今まで述べてきた土蜘蛛のあり方から考えると、五馬市に土蜘蛛五馬媛がいたことで、逆にこの道が古代にさかのぼって存在したことが確認されるのではなからうか。

以上豊後国の土蜘蛛の居住地も豊前国の場合と同じように、道と深い關係をもっていることを特徴とした。

豊前国豊後国の土蜘蛛と道との関係を知ると、その道が、緑野川の川上にいた土折猪折の場合を除いて、だいたい九州の東海岸より内陸へ向うものであることが判る。それは大和王権の勢力が九州の内陸部へ進出する道でもあっただろう。そのことをもう一度確認してみよう。

豊前国でもっとも古い畿内型古墳は、京都郡苅田町南原にある石塚山古墳である。<sup>(17)</sup>この古墳の南方には、景行天皇の土蜘蛛討伐後に行宮が置かれた長峽県（行橋市）があった。石塚山古墳からは三角縁神獸鏡が出土し、<sup>(18)</sup>その同縁鏡が、九州以外では京都府の大塚山古墳・大阪府の万年山古墳・岡山県の車塚古墳・奈良県の新山古墳から出土し、この石塚山古墳の被葬者が畿内地方と何らかの交流をもっていたことが知られる。この石塚山古墳のある苅田には、磐井の乱の後五三四年に肝等屯倉が置かれ、<sup>(19)</sup>律令時代には苅田駅が置かれた。この地が交通の要地であったことが判る。だがこの肝等屯倉が置かれた時、筑紫国豊国に七つの屯倉が置かれた。その中に我鹿屯倉があるが、これは苅田の南、行橋市に河口をもつ今川の中流域にある。この川は河口から西南西の方へさかのぼっていて、その中流の所で急に南折して彦山の方に向う。この南折する曲り角の所が田川郡赤村であり、ここに我鹿屯倉があった。この今川はその流れにそって道があるが、この道を河口の方から上って来て、赤村の所で南に曲らないで、まっすぐ標高一七〇メートルの立石峠を越えて下ると田川郡大任町になり、そこに桑原の地名があり、ここに桑原屯倉が置かれたようだ。そこは彦山川の流域であり、この川にそって彦山の方から下ってくる道があり、この道はさらに北にのび、香春岳の東を通って小倉に至る前述の田川道となる。桑原屯倉はその道にそって置かれた。その外、鎌屯倉・穂波屯倉が置かれたが、鎌屯倉は現在の嘉穂郡稲築町鴨生あたりであり、穂波屯倉は嘉穂郡穂波町あたりである。以上の肝等屯倉・我鹿屯倉・桑原屯倉・鎌屯倉・穂波屯倉を結ぶと、それは後の官道大宰府―豊前国府間のコースに似たものになる。<sup>(20)</sup>そし

てそれは四世紀代の石塚山古墳にみられた在地豪族と結んだ大和王権の勢力が、内陸部に進出していった結果、六世紀初めに確認できる道であった。そこに土蜘蛛の存在はないが、東部海岸より内陸部への道が如実に示される。

豊前の東部海岸には、この外に石塚山古墳と同時期の畿内型古墳として、山国川右岸の宇佐郡宇佐に赤塚古墳があった。この古墳出土の三角縁神獣鏡の同範鏡<sup>(21)</sup>は・京都府大塚山古墳、岡山県香登古墳・滋賀県岡山古墳・三重県筒野古墳から出土し、この赤塚古墳の被葬者と畿内と何らかの交流がうかがえる。このような地点から内陸部へ向うには、山国川・駅館川をさかのぼっていくことになるが、それらの川の川上にいたのが耳垂・鼻垂であった。彼らの居住地を通りこしてさらに道を進むと、山の向うには後の官道である豊後道が東西に通ち、この道はすでに小田富士雄氏によって銅鐸の道として弥生時代から、筑後と豊後とを結ぶ道とされるものであった。しかしそれぞれの川上から山越えしていく時、その道を案内できるのは平野に住む農耕民ではなく、この山道になった山峡に住む人でなければむづかしかった。土蜘蛛とはそのような山の道もよく知った人々であつたろう。彼らはおそらく広い農耕地を持つ者ではなく、道を通じて物資の交流の媒介をなすことによって生計を補うことも多かったのではなかろうか。その彼らが土蜘蛛として誅殺されたということは、彼らの居住地が道にそっていたことを考えると、たんにまつろわざる者として殺されたということではなく、大和王権が彼らを支配して九州の内陸部への道の支配を意図していたのに、その意図を拒否されたので誅殺したということではなかったか。殺された土蜘蛛の居住していた地点を地図の上で点検してみると、そこに大和王権の九州東部海岸より内陸部へ勢力をのばすコースがうかがえるのである。

つぎに豊後国の東部海岸についてみると、ここで大和朝廷の進出を示すものは、四世紀代のものとして海部郡の猫塚古墳がある。ここからは九州で唯一の碧玉製鉄形石二個が出土し、畿内地方との交流を示す。<sup>(22)</sup>この海部郡の東端佐賀関は地理的に四国の佐田岬にもっとも近く、瀬戸内海の島づたいに来て四国の海岸ぞいに来れば、もっとも上陸し易い所だし、この海部郡は海人の多く住む所で、一般に海人は大和王権との結びつきの早いものであった。<sup>(23)</sup>豊後国風

土記で、景行天皇がこの海部郡に上陸したとするのは、この郡の地方と大和王権との結びつきを物語るものである。この外に五世紀になると大分川の下流域にある亀甲山古墳があり、ここから出土する三角縁神獸鏡の同範鏡は兵庫県三塚古墳から出ている。また臼杵市諏訪の下山古墳から出土する鉄鋌は、畿内に出土するものと同じで、大和王権から分与されたものと考えられている。<sup>(24)</sup>

こうしてみてみると、豊後国の東部海岸にも大和王権の九州進出の上陸地点があったことが判るし、その内陸部への進出が予想できるのだが、直入県が置かれたことは、ある時期に竹田の所までは大和王権の勢力がのびてきていたことを示す。だがこの場合、この県が海岸線よりかなり奥まった所にあることは、筑前や、前述した豊前の地に置かれた海岸ぞいの県とは異った立地を示し、それは日向の諸県・肥後の球磨県と同じような立地を示している。井上辰雄氏は、九州における県は、その名が律令時代の郡名とほとんど同じであるところから県のことを記す史料の信憑性を問いつつも、県のおかれた地域と五世紀代の畿内型古墳の分布が一致することや、仁徳記の「諸県君牛諸の女、髪長比売」の实在性が濃厚なことから、九州の県は五世紀初頭以後に成立したと考えられた。<sup>(25)</sup>これには異説もあるが、直入の地方に県がおかれたのは、五世紀初頭、竹田に畿内型古墳として七ツ森古墳が造られた時期以後であろう。そしてこの直入県で土蜘蛛討伐がなされたということは、ここがさらに内陸部へ進出する拠点とも考えられたことではなかろうか。それはちょうど日向の諸県あるいは曾県と肥後の球磨県とを結ぶ線の周辺の地で熊襲征討がなされたことに似ている。豊後の東部海岸より竹田までは、大野川ぞいの後世の官道となる道が主なものだったろう。

大和王権の九州東部海岸から内陸部への進出の過程を以上のように考えると、豊後国風土記において、景行天皇が海部郡宮浦に上陸したということも何らかの史実の反映と考えられる。津田左右吉氏は、前述したようにこの風土記の説話において景行天皇が海部郡に上陸したというのは、風土記の編者が、日本書紀に依拠して風土記をつくりながら、書紀の巡幸道順が碩田国―速見邑となって地理上の誤りを犯しているので、これを矛盾なく説明しようとして、

この説話をつくり、かえって混雑したものになったとする<sup>(27)</sup>。氏は天皇の海部郡への上陸を虚構とみたのである。西海道風土記の甲類にはたしかに日本書紀に依拠した所が多い<sup>(28)</sup>。海部郡での速津媛の言葉は日本書紀の速津媛の言葉とはほとんど同じであった。だがそれでいて甲類には書紀にはない独自の伝承もあり、何らかの史実の反映と思われるものがある。筑前国風土記逸文の怡土県主の祖先伝承・肥前国風土記の多くの土蜘蛛説話・淀姫伝承・值嘉島の海人のことなど、その代表的なものである。豊後国風土記のこの海部郡の説話中、上陸地点が海部郡であるということもその一例で、海部郡の立地やその歴史的由来から考えて、ここを上陸地としたことには何らかの史実の反映があろう。大宰府成立以前、大和王権の勢力の九州進出の過程において、九州の東海岸にはこの海部郡の場合のように船で畿内と結ばれることが多かったようだ。前述した豊前国の場合、景行天皇が船で娑婆より長峽県に至ったのもそのような一つのケースである。

こう考えると、豊後国で大和王権の進出のコースの一つに、海部郡を出発点として碩田に至り、さらに碩田―速見の道順を迎えることもあり、そのことを記した史料もあったに違いない。津田氏はこの碩田―速見の道順を日本書紀の編者が地理的不案内のために犯した誤りとしたが、それは西海道東路が北から南へ向っているという官道のイメージでいくとたしかに誤りであったが、実はそこにかえって書紀編纂時の原史料の断片が、編者の地理的不案内のためにわれわれに提示されることになったといえるのである。日本書紀の景行天皇の巡幸説話は、多くの史料や伝承を編者が九州統一の政治的意図のもとにまとめたものであるが、その編纂の過程に、官道のイメージがあつてその道順に従つてまとめたことは否めない。だがこの官道のイメージを取り除いてみると、北から南へという西海道東路の方向とは別に、大和王権の九州進出初期の東海岸から内陸部へという道筋が知られ、碩田―速見という道順を史実とする面が出てくるのである。土蜘蛛の居住地を検討することによってこのような道筋が明らかになったのである。



(五)

豊前国・豊後国の土蜘蛛のことを考えていくと、土蜘蛛とは道に何らかの關係を持ち、道のことをよく知っている者といふことができる。大和王権が畿内から瀬戸内海へ勢力をのぼし、さらに九州沿岸へ、そして玄海灘・朝鮮海峡を渡って朝鮮半島へと進出の輪をひろげていく時、九州沿岸の海人たちは海の「導者」として協力的であつた。<sup>(29)</sup>だが大和朝廷の勢力が九州の内陸部へ向かうとして、山地にさしかかる時、豊国においては、その道の「導者」となるべき者はかならずしも協力的ではなかつた。「皇命に従はじ」として、誅殺されることが多く土蜘蛛としてことさらに異人種視されていた。

九州に官道の制が整っていく時、大宰府を中心とした九州支配体制も整備していったが、その時編纂された中央の史書地誌の中で、土蜘蛛は、津田氏指摘のように「土蜘蛛の主要なる觀念が皇命に服従しないもの」という形でのみ意識されることになり、<sup>(30)</sup>彼らが本来もつていた道に關した一面は忘れられ、同時に彼らが往來していた道の存在自体が見失われていった。彼らは官道のイメージの下で土蜘蛛といやしめられつつ今日までその名を残しているが、彼らはその地方の道主の如きものとして復権されるべきではなからうか。<sup>(31)</sup>

註

- (1) 井上辰雄「筑紫の大宰と九国三島の成立」『古代の日本・3・九州』S・45・2所収、二二頁。(SⅡ昭和、以下同じ。)
  - (2) 森貞次郎「弥生文化の發展と地域性1九州」『日本の考古学Ⅱ弥生時代』S・41・1所収。氏は弥生時代中期において土器の様式が「北部九州系と近畿・東瀬戸内系の接触が豊後地方でおこり、後者の影響のつよい新様式が成立」したとされている。
  - (3) 津田左右吉『日本古典の研究上』S・23・8 一五六頁。
  - (4) 井上通泰『豊後国風土記新考』S・10・1 五六頁・九四頁。
  - (5) 唐橋世済は元文元年(一七三六)江戸に生れ、天明四年(一七八四)岡藩主の侍医となり、医学館の教授となった。はじめ箋釈豊後風土記を著し、ついで豊後国志の編纂にかかり、いちおうこれも完成したが、寛政十二年(一八〇〇)に没し、箋釈豊後風土記は田能村竹田の努力で文化元年(一八〇四)刊行、豊後国志は文化元年(一八〇四)幕府に献上された。
  - (6) 日本書記の磐井関係の記事は詳しいが、文章に中国の芸文類聚からの引用文の所もあり、また物部麿鹿火の祖に大伴氏の祖になる人名が現われたりして史料批判の必要がある。また磐井の最期については「大將軍物部麿鹿火、親與賊帥磐井、交戦於筑紫御井郡……決機兩陣之間、不避万死之地。遂斬磐井」とあり、磐井は筑後国御井郡で斬られたことになっていて、風土記とは異なる。
  - (7) 秋本吉郎『風土記の研究』S・38・10「常陸国風土記及び九州諸国風土記の成立」の章、一二八頁。
  - (8) 小田富士雄「古代の日田―日田盆地の考古学―」九州文化史研究所紀要15号 S・45・3
  - (9) 日本古典文学大系『日本書紀上』景行十二年の条緑野川の注。
  - (10) 続日本紀、天平十二年十月戊午の条。
  - (11) 津田左右吉『日本古典の研究上』S・23・8 一五六頁。
  - (12) 川添昭二『菊池武光』S・41・6 一六六―七頁。
  - (13) 渡辺澄夫『大分県の歴史』S・46・8 三二頁の地図参照。
  - (14) 豊後国の古代の駅名の現在地比定については日本古典文学大系『風土記』の秋本吉郎氏の注による。以下同じ。
  - (15) 万葉集卷十一の二六七四、には救軍山をつぎのようによんでいる。
- 朽網山 夕居る雲の薄れ行かば われは恋ひむな 君が目を欲り

- (16) 井上辰雄「筑・豊・肥の豪族と大和朝廷」『古代の日本・3・九州』S・45・2所収。彌永貞三「大化以前の大土地所有」『日本経済史大系・1・古代』S40・6所収。
- (17) 小田富士雄「畿内型古墳の伝播」『古代の日本・3・九州』S・45・2所収。
- (18) 小林行雄「古墳時代の研究」S・36・4「第三章同範鏡考」。同範鏡については以下これによる。
- (19) 屯倉の所在地については日本古典文学大系『日本書紀下』の補注18—1—10と、平野邦雄「九州における古代豪族と大陸」(『古代アジアと九州』S・48・12所収)二五二頁の所在地の比定とを参照して考察。以下同じ。
- (20) 後世の官道は、伏見・網別・田川を通り築城に至り、この道とやや異っている。
- (21) 赤塚古墳から出土した同範鏡には石塚山古墳や福岡県筑紫野市の原口古墳と分有するものもあった。
- (22) 小田富士雄、前掲稿(17)、七九頁。
- (23) 平野邦雄、前掲稿、二二三—二四二頁。
- (24) 小田富士雄氏の御教示による。
- (25) 井上辰雄「筑・豊・肥の豪族と大和朝廷」『古代の日本・3・九州』所収、一四三頁。
- (26) 原島礼二「県の成立とその性格」続日本紀研究一六〇—一六三 S・47 氏はここで従来の県成立論とは異なった立場でこれを論じ、九州における県の成立を六世紀初頭においておられる。
- (27) 津田左右吉『日本古典の研究上』一五六頁。
- (28) 上田正昭『日本古代国家成立史の研究』S・34・12 Iの第三、古代王朝と巡幸伝説。
- (29) 拙稿「大宰府成立以前における日朝交渉—考察—船と海人と兵—」『九州史研究』S・43・6所収。
- (30) 津田左右吉『日本古典の研究上』第二篇第二章附録「土蜘蛛について」一九〇頁。
- (31) 肥前国風土記によると、佐嘉県主の祖大荒田は、佐嘉川の川上の荒ぶる神が道往く人の半ばを生かし半ばを殺すことについて占問いし、その時、土蜘蛛大山田女と狭山田女が献策し、この策が実行されると、荒ぶる神は和らいだという。この説話のよう、土蜘蛛が荒ぶる神を和らげ道を通ぜしめたということは、彼らによって道の往來が保証されたことであり、このような権能をもつ土蜘蛛は道主の如きものといえるのではなからうか。

## Summary

### Tsuchigumos in Toyo (豊) Province

Yoichi Cho

In the *Nihonshoki* and *Fudoki*, as a rule Tsuchigumos have been regarded as groups of a different race who disobeyed the command of the ruler. In the case of Toyo province, in researching places of Tsuchigumos' dwellings on a map, it was found that their places were on the mountainsides of ways running from the East coast of Kyushu to the inner country, Tsuchigumos should have been able to guide the ways to the inner country, but this is not written in the sources. It must be examined anew whether Tsuchigumos were closely related to the ways located near their dwellings.